

2026年1月7日

「第168回日本獣医学会学術集会優秀発表賞」受賞のご報告

2025年9月3日～6日に宮崎県宮崎市で開催された第168回日本獣医学会学術集会（病理学分科会）において、当所の伊藤宗磨研究員が下記の演題の発表で優秀発表賞を受賞したのでご報告申し上げます。

受賞対象演題

新規抗原変異株による伝染性ファブリキウス囊病への市販中等毒生ワクチンの有効性：
実験感染鶏を用いた病理組織学的解析

○伊藤 宗磨¹⁾、高橋 真理²⁾、佐藤 哲朗¹⁾、加藤 篤¹⁾、堤 信幸^{1,2)}、佐藤 真澄²⁾、
林 志鋒^{1,2)}、杉浦 勝明¹⁾

¹⁾一般財団法人日本生物科学研究所、²⁾日生研株式会社

講演概要

伝染性ファブリキウス囊病ウイルス (IBDV) は鶏のファブリキウス (F) 囊を中心にリンパ組織の萎縮を引き起こすウイルスであり、遺伝学的に8つのGenogroup (A1～A8) に分類されます。2015年に中国でGenogroup A2dに属する新規抗原変異型 IBDV (nvIBDV) が報告され、現在では日本を含むアジア各国で流行が拡大しています。これまで我々は nvIBDV の病原性を実験感染によって解析し、nvIBDV が F 囊及び脾臓の B 細胞を慢性的に減少させ、長期的な免疫抑制を招く可能性を報告してきました。本研究では Genogroup A1 に属する中等毒生ワクチン接種の有無が、nvIBDV 感染後の病理組織学的所見にどのような影響を及ぼすかを検討しました。

15日齢のSPF鶏を中等毒生ワクチン接種群と非接種群（各群とも12羽）に分け、21日後に全羽を nvIBDV で攻撃し、その7日後に剖検しました。肉眼的には両群とも F 囊が萎縮し、その最大径及び重量に差は認められませんでした。しかし、免疫染色及び画像解析を併用した組織検査の結果、F 囊及び脾臓において B 細胞や上皮性細網細胞の分布に違いが認められました。特に F 囊における炎症細胞浸潤、線維化、細胞残渣の蓄積の程度並びに F 囊及び脾臓における B 細胞の割合や上皮細網細胞の変化などについて、ワクチン接種の有無による差異が観察されました。また、本研究の条件下では、IBDV 抗原の検出状況にも群間で差が認められました。

これらの結果から、nvIBDV 感染時における F 囊及び脾臓の病理学的变化と事前のワクチン接種の有無の関係について、新たな知見が得られました。本研究は、nvIBDV 感染及びその防御に関する病理組織学的理的理解を目的とした基礎的検討です。

本講演の講演要旨は、当該学術集会の講演要旨集を御参照ください。